致道博物館　記念特別展　第2部

中興の祖 酒井忠徳と庄内藩校致道館 ⑤

酒井家庄内入部400年

学校づくりは大変〈道具編〉

忠徳は治世の最晩年、乱れた士風の刷新と優れた人材の育成を目的に、学校の設立に取りかかります。準備に5年の歳月を要し、忠徳が隠居する直前、文化2（1805）年2月に開校しました。

江戸時代、学校設立の際は、学問の神である孔子を祀る「聖堂（聖廟）」を整備しました。幕府の湯島聖堂に代表されるように、各藩でも聖堂を設けて祭祀「釈奠」を行っています。

釈奠は、古代中国の「礼」に基づき、陰暦2月と8月の最初の「丁の日」に行われます。日本では、大宝元（701）年に初めて行われました。室町時代に衰微しますが、江戸時代に儒教が盛んになり再興しました。

藩校でこのような儀式を行うのは、「『礼』は国家の衰退に関わるほど重要なものである。『礼』を正しくするためには『釈奠を正しく行う』ことである」と説く儒教の思想に基づいています。庄内藩でも開校以後、明治6（1873）年に閉校するまで、欠かさず聖廟に孔子（先聖）と顔淵（先師）を祀り、年2回、釈奠を催行しました。

庄内藩では、聖廟の建設のほか、釈奠に必要なものを整えました。先聖先師の像（致道館では肖像画を作成）、供物をのせる器類「祭器」、祭祀の時に奏でる「楽器」などです。

今回の特別展では、現存する致道館祭器を、全点展示しました。致道博物館の長い歴史の中で、初めてのことです。全て揃うのは、最後に釈奠を行った明治5年以来ですので、実に150年ぶりとなります。

祭器は、先聖と先師のための2組が誂えられました。文献では全く同じとありますが、フタの部分にあるカメの首の長さや、雲や山状の彫文様には微妙な違いがみられます。大部分が木製漆器で、「籩（乾物をのせる器）」と「簠（布巾等をいれる蓋付籠）」は竹や樹皮で作られ、洗盤は銅器です。

気になる制作者ですが、庄内関係の史料を書写した「鶏肋編」（山形県指定有形文化財）の著者加藤正従が「祭器塗替方」を務めていたとあります。また、阿部正己著「荘内人名辞書」には、庄内藩鎗術師範の武藤世外が祭器を制作したと記載されています。複数の庄内藩士が制作に直接関わっていたようです。

今回、荘内神社所蔵の楽器や扁額を含め、貴重な資料が一堂に並んでいますが、この展示は予想以上に大変でした。正直に申し上げると、展示したことを後悔するほど、大変でした。全部専用の木箱に収納され、厳重に保管されているものです。銅製の洗盤は、とてつもない重さで、館蔵品ではありますが、展覧会場へ運んでくるのも容易ではありませんでした。

次に勢揃いする機会は、もう無いかもしれません。どうぞお見逃しのないよう、お願い致します。

（致道博物館主任学芸員・佐藤淳）

県指定有形文化財の致道館祭器全点と、荘内神社所蔵の楽器が一堂に並ぶ。全点展示は初めて